

福 祉

1 学習指導と評価の工夫・改善

福祉の学習指導に当たっては、生徒や学校、地域の多様な実態に応じた具体的な目標を設定し、各科目のねらいや系統性・継続性などに考慮し、生徒が基礎的な内容の科目から専門性の高い内容の科目へと学ぶことができるよう工夫する必要がある。

また、評価に当たっては、学習指導要領に示す教科・科目の目標に基づき、各学校が設定した目標に準拠して「何を」「どのような方法で」「どの程度」評価するのかなど、評価規準を明確にして評価の客観性、信頼性が保たれるよう改善することが大切である。

2 評価方法の改善・充実

(1) 評価計画表の作成

ア 作成上の留意点

- 毎時間の観点別評価をすべて評定に総括する必要はない。
- 4つの評価の観点全てについて毎時間評価する必要はない。
- 具体の評価規準を決める場合には、どのような教材を使って、どのように取り組ませるのか、どのような能力を伸ばそうとするのかを明確にしておく。
- 学力を観点別に評価するためには、観察法、作品法、評定法、自己評価法、テスト法など、さまざまな方法を組み合わせて使うべきであるが、観点にあった方法を選択する必要がある
- 評価規準、学習活動、評価方法、4つの観点による評価が、有機的に関連付けられている必要がある。

イ 評価計画表の例

科目名 福祉 単元名 日本における社会福祉

科目名	社会福祉基礎			
単元名	社会福祉の歴史 日本における社会福祉			
単元の目標	(1) 我が国における社会福祉について、主に明治以降の歴史的展開に対する関心を高めさせ、意欲的に追究させる。 (2) 我が国における社会福祉について、主に明治以降の歴史的展開と社会福祉の現状とのかかわりを多面的・多角的に考察させる。 (3) 我が国における社旗福祉について、主に明治以降の歴史的展開に関する資料や情報を収集させ、適切に選択して活用させるとともに、課題を追究し考察した過程や結果をまとめたりさせたりする。 (4) 我が国における社会福祉について、主に明治以降の歴史的展開に関する基礎的・基本的な知識を身に付けさせる。			
評価の観点	ア 関心・意欲・態度	イ 思考・判断	ウ 技能・表現	エ 知識・理解
内容のまとめりごとの「社会福祉の歴史」の評価規準	社会福祉の歴史に対する関心を持ち、社会福祉の歴史的発展経過について意欲的に追究する態度を身に付けている。	社会福祉の発展と歴史的展開について自ら思考を深め、社会福祉の現状と歴史的展開とのかかわりを多面的・多角的に考察している。	社会福祉の歴史に関する様々な資料や情報を適切に選択して活用し、調査・研究等で考察した過程や結果をまとめ、図表化したり、発表や討論したりしている。	社会福祉の発展と歴史的展開について把握し、基礎的・基本的な知識を身に付け、社会福祉の歴史について理解している。

「社会福祉の歴史」の具体の評価規準	①戦後の社会福祉の歴史について関心をもち、現在の社会福祉とのかかわりを追究する態度を身に付けている。 ②日本の社会福祉の歴史に対する関心をもち、歴史的発展経過について意欲的に追究する態度を身に付けている。	①近代以前と明治以降から戦前までの社会福祉の歴史を多面的・多角的に考察し、現在の社会福祉とのかかわりについて考察している。 ②欧米諸国と日本との状況を対比させ、現代社会における社会福祉とのかかわりについて多面的・多角的に考察している。	①日本の社会福祉の歴史に関する資料や情報を適切に選択し、その概要を客観的に把握するとともに、その過程や結果を具体的かつ的確に表現している。	①近代以前と明治以降から戦前までの社会福祉の歴史について理解し、その知識を身に付けている。 ②戦後の社会福祉の歴史について理解し、その知識を身に付けている。
学 習 活 動	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
第1次 戦前の社会福祉のあゆみ (3時間)	○	◎イの① ・学習プリント 「明治以降の社会福祉の発展No. 2」	○	◎エの① ・学習プリント 「近代社会以前の営み」 「明治以降の社会福祉の発展No. 1」
第2次 戦後の社会福祉のしくみと発展 (10時間)	◎アの① ・学習プリント 「戦後の緊急援護と基盤整備」	◎イの② ・学習プリント 「福祉社会に向けた制度改革」	○	◎エの② ・学習プリント 「高度経済成長と社会福祉No. 1・2」 「福祉元年とその後の社会福No. 1・2」
第3次 単元のまとめ (2時間)	◎アの② ・レポート(調べ学習)での行動観察	○	◎ウの① ・レポート(調べ学習)	○

(2) 観点別評価の進め方

ア 考え方

(ア) 「関心・意欲・態度」について

評価規準の具体例「戦後の社会福祉の歴史について関心をもち、現在の社会福祉とのかかわりを追究する態度を身に付けている」(アの①)について、戦後の社会福祉の歴史について、学習プリントに自主的に調べた内容を記入し、現在の社会福祉とのかかわりについて自分の考えを述べていることが認められる場合は、「十分満足できると判断される」状況(A)と評価する。また、「努力を要すると判断される状況」(C)と評価される生徒への指導の手だてとしては、学習プリントの記入状況を点検し、また、戦後の状況について自分の祖父母の話などから身近な具体例を記入させる。

(イ) 「思考・判断」

評価規準の具体例「欧米諸国と日本との状況を対比させ、現代社会における社会福祉とのかかわりについて多面的・多角的に考察している」(イの②)について、教科書の資料を用いて、学習プリントに自分で調べた内容や欧米と日本との比較についてまとめ、現代の社会福祉とのかかわりについて考察した内容を記入していることが認められる場合は、「十分満足できると判断される」状況(A)と評価する。また、「努力を要すると判断される状況」(C)と評価される生徒への指導の手だてとしては、教科書や資料を用いて、学習プリントに欧米諸国の社会福祉の内容を整理させると

ともに、該当箇所の補助プリントを活用して現在の日本の社会福祉とのかかわりについて考えさせる。

(ウ) 「技能・表現」

評価規準の具体例「日本の社会福祉の歴史に関する資料や情報を適切に選択し、その概要を客観的に把握するとともに、その過程や結果を具体的かつ的確に表現している」(ウの①)について、日本の福祉社会の歴史に関する資料や情報を収集し、その概要を把握するとともに、自分の考えをレポートにわかりやすくまとめていることが認められる場合は、「十分満足できると判断される」状況(A)と評価する。また、「努力を要すると判断される状況」(C)と評価される生徒への指導の手だてとしては、教科書や資料を用いて、学習プリントに日本の社会福祉について調べた内容を整理させ、そこから自分の考えをレポートにまとめさせる。

(エ) 「知識・理解」

評価規準の具体例「戦後の社会福祉の歴史について理解し、その知識を身に付けている」(エの②)について、学習プリントに戦後の社会福祉の歴史について正確に記入し、わかりやすく記入していることが認められる場合は、「十分満足できると判断される」状況(A)と評価する。また、「努力を要すると判断される状況」(C)と評価される生徒への指導の手だてとしては、学習プリントの記入状況を点検し、該当箇所の補助プリントを活用して、戦後の社会福祉の歴史について記入させる。

イ 学習プリントによる評価方法

〔具体の評価規準及び評価の観点〕

「戦後の社会福祉の歴史について関心をもち、現在の社会福祉とのかかわりを追究する態度を身に付けている」(アの①)

〔評価方法〕

学習プリントの記述の点検・分析

〔評価の実際〕

- ・各設問に対して自主的に調べた内容を記入しているかを、学習プリントの記述を授業中に机間指導しながら点検する。
- ・各設問に対して自主的に調べた内容を記述するとともに、現在の社会福祉とのかかわりについて自分の考えを述べているかを、授業後に提出させた、学習プリントの記述を分析することで評価する。

〔留意事項〕

- ・戦後の社会福祉の歴史について、学習プリントに自主的に調べた内容を記入し、現在の社会福祉とのかかわりについて自分の考えを述べられていることが認められる状況を(A)と評価する。
- ・学習プリントへの記入がほとんどされておらず、戦後の社会福祉の歴史と現在の社会福祉のかかわりについて自分の考えが述べられていない(C)の状況の生徒については、補助プリントを作成し努力を要すると評価した箇所を整理・記入させたり、戦後の状況について自分の祖父母の話などから身近な具体例を

記入させることにより、理解を深める。

※ 「戦後の緊急援護と基盤整備」(1時間)の学習プリントの例

1 『社会福祉三法』の成立に関する年表を完成させなさい。			
年 代	世 界 の 動 き	日 本 の 動 き	社 会 福 祉 の 動 き
昭和20年(1945)	国際連合発足 世界人権宣言	第2次世界大戦終結	
昭和21年(1946)		[1] 制定	[2] 法制定
昭和22年(1947)			[3] 法制定
昭和23年(1948)			
昭和24年(1949)			[4] 法制定
昭和25年(1950)			新 [2] 法制定
昭和26年(1951)		日米安全保障条約調印	[5] 法制定
昭和27年(1952)			朝日訴訟開始
2 終戦直後の社会状況についてまとめなさい。			
3 終戦直後の福祉の課題についてまとめなさい。			
4 次の各法の課題について考えなさい。 『生活保護法』(旧法) (新法) 『児童福祉法』 『身体障害者福祉法』			
5 『社会福祉事業法』の内容についてまとめなさい。			

(3) 観点別評価の総括

ア 単元の観点別評価の総括についての考え方

単元の観点別評価の総括を行う方法としては、「学習活動における具体の評価規準」に照らして、学習活動における各規準ごとにA、B、Cの3段階で評価を行い、単元が終了した段階で観点ごとにA、B、Cの判定をする。

総括の具体的な方法として、A、B、Cの個数や割合に基づく方法やA、B、Cを数値に換算して集計する方法が考えられる。

具体的方法として、観点別の「学習活動における具体の評価規準」に対する評価を点数化して、その平均点で総括する方法を表1で例示する。「学習活動における具体の評価規準」の各規準ごとに、A、B、Cの3段階で評価を行い、「十分満足できる」状況(A)を3点、「おおむね満足できる」状況(B)を2点、「努力を要する」状況(C)を1点として点数化し、各観点別の合計点を各規準の数で除した数値を表2の「観点別評価の分割点の例」に合わせて評価を行う。

この場合は、福祉関連の職業に従事する者の育成を目的とし、介護福祉士国家試験受験資格の取得を目指していることから、「おおむね満足できる」状況(B)以上が国家試験に対応するレベルであると設定し、観点別評価の分割点例を表2の通りとしている。なお、本事例では各観点内での評価方法別による重み付けは行っていない。

表1 単元末の総括の例

日本における社会福祉	関心・意欲・態度	思考・判断	技能現	知識・理解
第1次		A		B
第2次	A	B		C
第3次	A		B	
点数化	$2A \div 2$ $= 2 \times 3 \div 2$ $= 3.0$	$(A+B) \div 2$ $= (3+2) \div 2$ $= 2.5$	$B \div 1$ $= 2 \div 1$ $= 2.0$	$(B+C) \div 2$ $= (2+1) \div 2$ $= 1.5$
単元での評価	A	B	B	C

表2 観点評価の分割点例

$2.5 < A$
$2.0 \leq B \leq 2.5$
$C < 2.0$

※ 「努力を要する」状況(C)と評価される生徒については、教科の目的を達成するため、補充等の指導を行い、「おおむね満足できる」状況(B)以上の評価となるような取組が求められる。

イ 学期末及び学年末の評価への総括の考え方

単元ごとの観点別評価から学期末及び学年末の観点別評価へ総括する方法の例をいくつか次に示す。

第1の具体的方法(表3)は、「ア 総括の考え方」で取り上げたのと同じように各単元で総括した各規準ごとのA、B、Cの3段階評価を「十分満足できる」状況(A)を3点、「おおむね満足できる」状況(B)を2点、「努力を要する」状況(C)を1点として点数化し、各単元の各観点別の合計点を各単元の数で除した数値を、表2の「観点別評価の分割点例」に対応させて評価を行う方法である。

表3 学期末(学年末)の総括の例1

単元	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
1	A	A	B	B
2	A	B	B	C
3	A	B	B	B
点数化	$3A \div 3$ $= 3 \times 3 \div 3$ $= 3.0$	$(A+2B) \div 3$ $= (3+2 \times 2) \div 3$ $= 2.34$	$3B \div 3$ $= 6 \div 3$ $= 2.0$	$(2B+C) \div 3$ $= (2 \times 2 + 1) \div 3$ $= 1.67$
単元での評価	A	B	B	C

第2の具体的方法(表4)は、A、B、Cのパターンから総括する方法である。対象の学期で5つの単元を行ったとすると、各観点において「すべてAならA」、「すべてCならC」、「Aが2つ、Bが3つならB」というようにパターンを決めておき、評価を行う方法である。

もし定期考査が行われ、その得点を観点別評価に組み入れる必要がある場合には、表4の[]の部分で例示したように、再度の総括を行うという方法が考えられる。まず、考査問題を分析して、個々の問題がどの観点に対応しているかを明らかにする。そして、観点ごとに得点を集計し、その満点に対する達成割合によって、A、B、Cの3段階表示に変換する。例えば80%以上をA、79%から60%までをB、59%以下をCとする。そのうえで表4の[]の部分で示した観点別の単元末集計総括のA、B、Cの評価と対応づけて、表4の[]の部分で示した最終的な学期末総括を行う。表4では、定期考査の評価を重視して最終的な学期末総括を行っているが、その逆や等しい重みで総括する場合もある。

表4 学期末(学年末)の総括の例2

単元	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
1	A	B	B	B
2	A	B	B	C
3	B	A	B	B
4	B	C	C	C
5	B	C	B	C
単元末集計総括	B	B	B	C
定期考査	A	C	B	B
学期末総括	A	C	B	B

学年末の評価は、表3又は表4のような手順でその間のすべての単元評価をもとにして行う方法もあるが、それぞれの学期末総括をもとにして、再び総括するという方法もある。

ウ 学年末の評価の評定への総括の考え方

学年末の観点別評価から評定への総括する方法の例をいくつか次に示す。

第1の具体的方法(表5)は、学年末の各観点別評価ごとのA、B、Cの3段階評価を「十分満足できる」状況(A)を5点、「おおむね満足できる」状況(B)を3点、「努力を要する」状況(C)を1点として点数化し、4つの観点の評価の平均値をもとに算出する方法である。小数点以下の扱いについては、四捨五入あるいは五捨六入などが考えられる。また、表6のようにして、教科の特性や学年段階を考慮して、観点ごとに重み付けをつけて平均値を求める方法もある。

表5 点数化して平均値を求める方法による総括の例

評価の観点	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
評価	A	B	B	C
点数	5	3	3	1
評定の算出式	$(5 + 3 + 3 + 1) \div 4$ (観点の数) = 3.0 (平均値)			
評定	3			

表6 点数化して観点ごとに重み付けを行って平均値を求める方法による総括の例

評価の観点	関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
評価	A	B	B	C
点数	5	3	3	1
重み	1	2	1	2
重み付け後の点数	5	6	3	2
評定の算出式	$(5 + 6 + 3 + 2) \div 6$ (重みの合計) = 2.7 (平均値)			
評定	3 (四捨五入)			

第2の具体的方法(表7)は、観点別の評価(A、B、C)のパターンに応じて、評定(5、4、3、2、1)を決める方法である。典型的なパターンごとに評定値を割り当てて行く方法である。教科の特性や学年段階を考慮した場合、典型的なパターンに対応する評定値の範囲を変えることも考えられる(表7の評定例1・2参照)。

表7 4観点の評価パターンから導き出す方法による総括の例

A、B、Cの数	典型的なパターン	評定例1	評定例2
A 4個	A A A A	5	5
A 3個・B 1個	A A A B	4	5
A 2個・B 2個	A A B B	4	4
A 3個・C 1個	A A A C	4	4
A 2個・B 1個・C 1個	A A B C	3	4
A 1個・B 3個	A B B B	3	3
A 1個・B 2個・C 1個	A B B C	3	3
B 4個	B B B B	3	3
A 2個・C 2個	A A C C	3	3
B 3個・C 1個	B B B C	3	3
A 1個・B 2個・C 1個	A B B C	2	3
B 2個・C 2個	B B C C	2	2
A 1個・C 3個	A C C C	2	2
B 1個・C 3個	B C C C	1	2
C 4個	C C C C	1	1

ここでは観点別評価の総括を、いくつかの具体例を挙げて行って見たが、この他にも様々な考え方や方法があり、教科の特性や学年段階等を考慮して、各学校において工夫することが望まれる。